

を後よひをいに精いていより燭とく唱へ
事れもよや、古平の化へ脹へる世火を
の文字れ雅なうさる夜は飯煮とく火改め
りるにや、田川郡已火の山を意の山と改
へ事もありるを飯煮の東の方れ崩
まを見るに砂ふりて危の志を砂乃
よりへる狼煙の火を以て危の智へる
よや、往古ハ大和は春日野も燔作を設
てと火中と云るを歌へ春日野のや
ふいのれりいと詠をへる是なりとそ擧

納秋餐とく被地より官人餐飯の料を納
へ事よや、祇武記は於菟狹川上造一柱
騰宮而奉饗焉是国造祖帝を餐へる事
をいふ又同記は弟猾オトウケシ人名之大設牛酒テ以勞
饗皇師焉とあり按るに餐ハ飲食を人
は施の詞もて上下たはる用の前之孝徳紀
秋七月己朔於難波朝饗北夷九十人東
夷東陸九十一人云々又國の書にも割キ鮮チ
野饗ニツライ懽キキラヒ勅賞チ功とあり又東都都賦は靈祖皇
考来顧来饗とあれを鬼神に飲食をなす